

女子学生の就活応援 「WINGの会」がセミナー



多摩キャンパスのパネルディスカッション会場▲

女子学生の就職活動の支援を目的とした第27回WINGの会「女子学生応援セミナー」が2021年11月20日、多摩キャンパス会場の参加者と、オンラインの参加者を結び、ハイブリッド形式で開かれました。卒業生でつくる学会の女性支部「女性白門会」が1980年代に発足させたWINGの会と、キャリアセンターが共催しました。

企業や公務員に内定している4年生3人の就活経験をもとにしたパネルディスカッションと、外資系企業や社会保険労務士事務所で勤務経験があり、現在は社労士事務所代表を務める佐佐木由美子さん(中央大学大学院戦略経営研究科修了)による「人生100年時代のワークスタイル～自分らしい生き方を考えよう」と題した講演が行われ、参加した学生が熱心に聞き入っていました。

質問項目

- ① 大学2年生のときは、どんなふうにご過ごしていたか
- ② インターンシップに参加したか
- ③ 就活における公務員、民間企業の両立について
- ④ 志望する業界の絞り方について
- ⑤ 自分自身の就活の「軸」としていたこと。どのように軸を作ったか
- ⑥ 就活において、結婚・出産・育児などのライフイベントについてどのように考慮したか
- ⑦ 後輩たちへのメッセージ



パネリストの3人が就活体験を後輩たちに語りかけた。(右から) 水谷彩さん、守屋美聖さん、本田まどかさん▲

厚生労働省一般職に内定した文学部の水谷彩さん、三井住友銀行に内定した法学部の守屋美聖^{みさと}さん、ハウス食品内定の経済学部の本田まどかさんの4年生3人によるパネルディスカッション「今知りたい就活のリアル!～就活経験者が語る本音の60分」は、聴講した1～3年生の質問に答える形で進行了ました。

真摯に就活と向きあった3人の本音を質問項目ごとに紹介します。

「落ち込んだとき… 一人で抱え込まず誰かに相談を」



水谷彩さん(文4)

内定先・厚生労働省一般職

- ①就活に関わることは何もしていませんでした。
- ②インターンシップには参加せず、東京都庁でアルバイトをしていたので、それがインターンシップのような感じでした。
- ③民間企業は受けていません。周囲にも基本的に併願している人はいませんでした。
- ④教育福祉に興味があったので、公務員(という進路)は漠然と決めていました。
- ⑤厚労省は教育福祉を含めて、いろいろな分野の仕事ができる。他に受かっていた省庁はその分野のみに(業務が)絞られるので、厚労省の方がさまざまな経験をできるという面から、自分に合っていると思いました。強いて言え

ば、軸として「なぜ(この省庁、役所を)受けたの?」という質問に答えられるように、やんわりした分野意識があるといいと思います。

- ⑥結婚・出産などは考えていませんでした。ライフイベントは未定ですが、1カ所に定住できる就職先に行こうと思っていました。
- ⑦公務員と民間企業では就活のやり方が全然違います。実は第1志望の試験に受からずに落ち込んで、勉強も1週間くらい手につかなかった。母に相談して立ち直ったのですが、落ち込んででも誰かに相談して、自分で抱え込まないほうがいい。一度失敗しても何とかあります。

「どこに内定したから 正解ということはない」



守屋美聖^{みさと}さん(法4)

内定先・三井住友銀行

- ①就活関連の活動はほとんどしていませんでした。部活(バレーボール部)と授業の毎日でした。
- ②ワンデー(1日限り)を含めると30社くらい参加しました。複数日参加のインターンシップでは早期選考に結びつくケースもありました。

- ③教育実習と(民間企業の)面接ラッシュが重なる時期もあり、早め早めに動くことが大事だと思いました。
- ④幅広く業界を見て、説明会、インターンシップ、業界研究、自己分析で絞っていきました。
- ⑤さまざまな人と関わることができ、成長できる環境がある

かどうかを重視しました。環境としては尊敬できる人がいるか、裁量権があるかどうかです。自己分析で「どんなときにやりがいを感じたか」「どんな人になりたいか」「成長を続けたい」「いろいろな人と話したい」などを棚卸して、そこからエピソードを深く掘り下げていく。紙にメモしていくことをお勧めします。

- ⑥全く影響しませんでした。全国に転勤しても戻ってこられる制度が福利厚生としてある。若いうちだからこそ、いろいろなところに拠点をつくるのもいいかなと思いました。
- ⑦まずは目の前のことに全力で取り組む。就活のとき、結果

的にそのエピソードが生きます。また、たとえば業界研究について「やらなければいけない」ではなく、「新しい業界を知ることができて面白い」などと前向きな気持ちで臨んでください。最後に伝えたいのは、「どこに内定したから正解ということは絶対はない」と思っていて、(正解かどうかは)入社してからどれだけ努力できるかにかかっているということです。内定の時点で、うまく行ったかどうかは分かりません。やりたいことを軸に大事に進路を決めていってほしいと思います。

「ひたすら『なんで?』を繰り返した自己分析」



本田まどかさん(経済4) 内定先・ハウス食品

- ①2年生のときは、オーストラリアで1か月間のインターンシップを経験しました。この経験で、私には営業職が向いていると確信し、DXマーケティングや人材育成に取り組むたいと考えるようになりました。
- ②15社くらい参加しました。複数日参加のインターンシップでは早期選考や、1度の面接で内定が出るなどの優遇がありました。
- ④最後の最後まで内定をもらった(企業の)業界はばらばらでした。軸(下記)を中心として、将来的にはそれを実現できるところをと考えていました。コンサル系の(企業の)人と話したときは、「御社から見て食品業界は今後どうなるか」という質問をして、それが(食品業界の企業での)面接に役立ちました。社会人の目から見た自分の志望業界ということです。
- ⑤最初は悩みました。自己分析で、自分がやってきたことを書き、友達などの身近な人に見せて、「なんで?」と聞き返してもらおうようにしていました。ひたすら「なんで?」を繰り返すと、自分の考え方も根本的なところまで(分かって)くるんです。そうすると、どういう考え方をここまで来たの

か、どういう結果を得たのかが明確になる。これをやると早い段階で軸が明確になります。

- ⑥複数の内定先から一つに絞る際に考慮しました。どのようなライフプランを歩んでも後悔しない、納得できる仕事に就けたらいいと思いました。最終的にハウス食品に決めたのは福利厚生(の充実)が理由です。
- ⑦インターンシップで大手食品メーカーを20社くらい落ちました。1人でやっていて、コロナ禍で友達にも会えず、一時期は本当に病みました。食品メーカーはもうあきらめようと思ったくらいのもど底でした。そこで自分が変わったのは、人に助けを求めよう、人にどんどん質問をしようと思ったことです。友達やほかの人に助けを求めて、一緒に取り組むというのも大事で、1人でやらないほうがいいと思います。そして、有名な会社だからと名前を選ぶのはやめた方がいい。「自分がやりたいことを達成できるから、この会社」ならいいのですが、「大手だから」「名前が知られているから」「有名だから」ではなく、自分自身が何をしたいかで決められれば、それが「納得内定」なのではないでしょうか。

これからの働き方に影響する3つの要因 「人生の長期化」「ITの進化」「グローバル化の進展」

佐佐木由美子さん講演

セミナーで講師を務めた佐佐木由美子さんは、講演の中で、これからの働き方に影響を与える要因として、平均寿命の伸びに伴う「人生の長期化」と、「ITの進化」「グローバル化の進展」を挙げた。

人生の長期化がもたらすこととして、「一生、ひとつの仕事をやり続けるのは現実的ではない」と指摘。1986年の男女雇用機会均等法施行、1992年の育児休業制度の法制化などを経た“第1世代”の女性たちが、定年後の年金受給への不安や寿命の伸びに伴って、「新たな課題として、シニアの働き方をどうするかと真剣に悩み始めている」と説明した。

そのうえで、ライフステージに応じて働き方を見直す人が増えていくことを指摘。働く期間が長期化していく中で、職業ニーズや体力も変化していくため、社会に出てから新たなスキルや知識を習得するための学び直しはますます重要になると訴えた。

ライフステージに応じた柔軟な働き方を

ITの進化では、場所にとらわれない働き方や、個人や中小も設備投資なしでビジネスに必要なインフラを持てるようになったこととともに、起業もしやすくなり、AIの発達で新しい職業が誕生すると解説。グローバル化の進展によ

り、ヒト、モノ、カネ、企業などが世界規模で一体化し、企業などにとってはIT人材、デジタル人材の確保や育成が課題となるうえに、世界規模での業務の取り合いも起きてくると予見した。

これらの要因により、ライフステージに応じた柔軟な働き方や、自分中心のライフキャリアをより実現しやすい社会になっていくと説

明。働くうえで、「日々の経験から自分の好き・苦手な要素を見つけ、自分にとって譲れない大事な価値観は何かを理解する」「自分の好奇心を大事にし、興味・関心があるものを学び続ける」「仕事や学びのネットワークを積極的に広げていく」「失敗を恐れず、果敢にやってみる」などが大切な心構えだ、と学生たちに呼びかけた。



講師紹介

佐佐木由美子さん

ささき・ゆみこ。社会保険労務士、人事労務コンサルタント。外資系企業日本法人を退職後、社会保険労務士事務所などに勤務。2005年にグレース・パートナーズ社労士事務所を開業、翌年にグレース・パートナーズ株式会社を設立した。中小・ベンチャー企業を中心に、多様な働き方や人事労務管理などをサポートしている。中央大学大学院戦略経営研究科修了、MBA取得。労務関連の著書やメディア連載も多数。

第27回WINGの会「女子学生応援セミナー」概要

〈日時〉2021年11月20日(土) 14:00~16:50

多摩キャンパス「FOREST GATEWAY CHUO」とオンラインの参加者を結んだハイブリッド開催

〈第1部〉講演会「人生100年時代のワークスタイル~自分らしい生き方を考えよう~」

登壇者:佐佐木由美子さん(社会保険労務士、グレース・パートナーズ株式会社代表取締役)

〈第2部〉内定者パネルディスカッション

「今、知りたい就活のリアル!~就活経験者が語る本音の60分~」

アナウンス研究会の2人が学生MCを体験



第30回中央大学

初の
オンライン
開催

ホームカミングデー

2021年11月21日に開催された第30回中央大学ホームカミングデーは、初めてオンラインで開催され、YouTubeで生配信されました。東京五輪に出場した「白門オリンピック」とのトーク企画や、台湾のIT大臣と中大生のプレミアム・トーク、8学部の学生の“今”を紹介する「CHUO 8 STORIES」の映像配信などが行われました。

学生MC（マスターオブセレモニー）として司会進行役を務めたアナウンス研究会の大西浩太郎さん（文3）、平井綾乃さん（商1）の2人に、貴重な経験から得られたもの、今後の糧となったことなどを綴ってもらいました。

「臨機応変の対応力が大切」 「経験を積みMCの スキル上げたい」



平井綾乃
(商1)

2021年4月に中央大学に入学後、サークル活動も思うようにできておらず、1年生のうちに何かを経験したいと思っていたところ、アナウンス研究会の大西浩太郎先輩から声をかけていただき、ホームカミングデーの学生MCを務めることになりました。

今年は初のオンライン、生配信で開催されました。元サッカー日本代表でサッカー部OBの中村憲剛さんに対する第1回学员栄誉賞の授賞式に始まり、台湾のオードリー・タンIT担当大臣と中大生のプレミアム・トーク、中大出身者・現役学生で東京オリンピックに出場した選手とのトーク企画など、素晴らしい企画が盛りだくさんでした。一つひとつの番組進行をスムーズにするため、学生MCとして力を尽くしました。

私は高校時代、放送部だったわけでも、司会やアナウンスを経験したことがあるわけでもなく、不安な気持ちでいっぱいでした。学生MCの担当が決まってから、YouTubeで司会のコツを調べたり、台本をかまわずに言うことができるように練習したりしました。

当日は緊張しながらも、アクシデントにも対応できるよう、常に心構え

をしていましたが、ライブ配信で流れている映像が止まってしまったとき、どうすれば良いか戸惑ってしまいました。一緒に学生MCを務めた大西先輩が落ち着いて対応され、難なくその場をしのぐことができました。

また、中大OGの曾根純恵さん(日経CNBCキャスター)と交流する場面では、配信が予定より早く進んでいたのですが、曾根さんが機転を利かせて台本通りの時間進行になるよう話を広げてくださいました。プロの力を肌で感じ、その実力に圧倒されました。オンライン開催ならではのアクシデントがありながらも、無事成功のうちに終えられたのはスタッフの方々、先輩やプロの力によるものです。

「CHUO 8 STORIES」 から大きな刺激

特に印象に残った企画は「CHUO 8 STORIES」です。8学部それぞれの現役中大生が今、何に取り組んでいるのか、ストーリー仕立てになって紹介されている映像です。中でも、私と同じ商学部の中小原杏優さんの「公認会計士の現役合格を目指して」というストーリーが

深く印象に残りました。

中小原さんは公認会計士現役合格という明確な目標を持ち、日々努力され、なんと大学3年次に目標を達成しました。ストーリーの中で、「目標はどんどん上げていくべき」と話されており、まだ明確な目標が定まっていなまま大学生活を送っていた私にとって大きな刺激となりました。

今回初めて学生MCを体験し、私にはまだまだ臨機応変に対応する力がないと思いました。急に話を振られた際にうまく返せず、言葉に詰まってしまった場面があり、情けなく、悔しい思いが残りました。これからは、アナウンス研究会で司会の仕事に積極的に挑戦し、経験を積み、先輩方のようになれるよう、自分のスキルをあげていきたいです。

そして、CHUO 8 STORIESで紹介されていた学生たちを見習い、今しかできないこと、将来に向けて自分が努力しなければならないことを見つけ、行動に移していきたいです。ホームカミングデーに携わったことは、自分の貴重な体験になったと思います。

プロのMCの技量、 映像・音響スタッフの動きを 間近にした経験 掛け替えのない充実した一日に



大西浩太郎
(文3)

アナウンス研究会は主な活動として、大学内外のMCや司会など、さまざまな“声のお仕事”に携わってきました。アナウンス技術はもちろん日々の練習があつてこそ上達しますが、やはり現場を体験・経験しないと、緊張感やトラブル対応などの経験値は得られません。

しかし、このコロナ禍です。第1に、後輩たちとのその日々の練習が難しくなりました。オンラインは現実感がなく、マイクやカメラをオフにすればその場から消えてしまうことができます。同期や後輩を問わず、参加率は下がるばかりでした。そもそも、一度も生で顔を合わせたことがないメンバーが生じざるを得ないという状況は、あまりにも悲しすぎました。

第2に、アナウンス研究会に例年、仕事を依頼してくださっていた団体のイベント中止です。実施されるイベント(主に式典)の依頼はありましたが、その格式を考慮すると未経験の後輩に経験させるには荷が重すぎました。こうして、後輩たちは

経験の場がないままに時が過ぎ、2021年度の後期に至ります。徐々に新型コロナの情勢も落ち着き、仕事の依頼数も回復してきましたが、声をかけてもなかなかメンバーに引き受けてもらえません。練習もまともにできない環境では、無理もない話です。

後輩たちの勇気に感動

今回のMCも、限られた同期のメンバーで引き受けるしかないと考えていたところ、平井綾乃さんをはじめとした後輩たちから声が上がりました。最初の一步を踏み出すのは大変度胸のいることです。その一步を踏み出してくれた後輩の勇気に感動を覚えました。

ホームカミングデーという貴重な場での学生MC体験は、個人的にとっても充実した一日だったと思います。実りあるコンテンツはもちろん、プロである曾根純恵さんのMCの技量や、生放送の舞台裏のプロ

の映像・音響スタッフの皆さんの動きを間近に見た経験などが、自分自身の今後の糧となったことは間違いありません。特に、後輩とともに初めて現場を体験し、MCやアナウンスのノウハウはもちろん、たわいのない学生生活の体験を共有できたことは掛け替えのないものだと思っています。

コロナ禍にあつて、先輩としていかにサークルを運営、活動させるかに苦心する日々でしたが、同じアナウンス研究会で学生生活を送るならばやはり対話は欠かせない、お互いを知る必要があるということも、今回の経験でようやく分かりました。アナウンス研究会は3年で引退ということもあり、あとわずかな期間ではありますが、得られた知識・経験・技術を皆で共有できるよう、“楽しく”励んでいきたいと思えます。

結びに、アナウンス研究会に今回の学生MCという貴重な場を提供してくださった関係者の皆さまに深く感謝の意を表します。

第30回ホームカミングデー特設サイトはこちらからご覧になれます。 >



「J」を代表する選手に」 「開幕スタメンを勝ち取る」 サッカー部 Jリーグ内定の4選手が抱負

サッカー部は2022年1月7日に記者会見を開き、Jリーグのチームに入団が内定した4選手を発表した。4人は「開幕スタメンを勝ち取る」「チームのJ1昇格に貢献したい」「Jリーグを代表する選手になる」と抱負を語り、中大での4年間で培った技術や経験をもとに、大活躍することを誓っていた。

会見に臨んだのは、水戸ホーリーホックに入団が内定し

た高岸憲伸選手(文4)、ヴィッセル神戸に内定した坪井湧也選手(商4)、カタール富山に入団する堀脩大選手(経済4)、福島ユナイテッドFCに内定の新井秀明選手(経済4)の4人。

4人は会見で入団の決め手となったことや目標などを語り、チームのユニフォームにも袖を通して笑顔で記念撮影に応じていた。



高岸憲伸選手

「人として育成するというチーム方針に共感しました。J1昇格に向け、より多くの試合でサポーターと勝つ喜びを共有したい。より多くの得点に絡める選手でありたい」



坪井湧也選手

「地元(兵庫県)のチームで幼い頃からヴィッセル・ファンでした。(ヴィッセルの先輩GKの)飯倉大樹選手の良い部分を盗みながら、Jリーグを代表するGKになりたい。大学では1人でプレーしているわけではないということ学びました」



堀脩大選手

「(カタール富山の)練習に参加して一人ひとりのレベルが高く、自分が成長できると思った。シュートの精度の高さやチャンスメイクに自信があります。開幕スタメンを勝ち取り、チームのJ2昇格に貢献したい」



新井秀明選手

「(福島ユナイテッドFCは)DFも積極的に攻撃参加してアグレッシブなチームという印象です。左利きのセンターバックということ自体が長所になると思う。J3の中で上位に食い込めるように貢献し、1年目から大きく飛躍したい」



▲ Jリーグでの飛躍を誓ったサッカー部の4選手

中央大学サッカー部 4選手の進路

名前	学部	ポジション	身長・体重	内定先チーム
高岸 憲伸	文4	MF	175センチ・62キロ	水戸ホーリーホック
坪井 湧也	商4	GK	183センチ・73キロ	ヴィッセル神戸
堀 脩大	経済4	MF	177センチ・68キロ	カタール富山
新井 秀明	経済4	DF	184センチ・75キロ	福島ユナイテッドFC



「堅守速攻」で 40年ぶりインカレ制覇

ハンドボール部「のびのび楽しくプレー」花開く

ハンドボール部が2021年11月の第64回全日本学生選手権大会（インカレ）で、40年ぶり4回目の優勝を飾った。チームの持ち味である「堅守からの速攻」を存分に発揮し、頂点を極めた。優勝メンバーは東京五輪にも出場した部井久アダム勇樹選手（法4）ら実力者ぞろい。インカレ優勝時の主将、中村仁宣選手（文4）は「能力の高いメンバーがそろったチームで、いかにチームとして戦っていくかを追求し、それがかみ合った結果の優勝です」と話す。卒業後は実業団、湧永製菓での活躍を目指す中村選手にインカレ制覇を振り返ってもらった。

準決勝の筑波大戦がヤマだった。関東1部リーグでも顔を合わせる「互いに手の内を知る相手」だ。前半リードを保った中大は、後半に1点差まで追いつけられた場面で、ディフェンス力を発揮した。GKの宮城風太選手（経済4）の活躍などでゲームの流れを相手に渡さず、最後は10点差をつけて決勝進出を決めた。

「連戦で疲労もたまっていたのですが、『ラスト1試合（決勝）は楽しむだけ』とチーム全員のモチベーショ

ンが上がっていました」と中村選手。決勝で優勝が決まった瞬間はコート上に4年生を中心とした歓喜の輪ができ、喜びが弾けた。

初戦の先制点 キャプテンの有言実行

一発勝負のインカレは怖い。ただ、チームの司令塔である中村選手が「どんな相手でも必ず勝てる」とは限らない」と冷静に振り返った通

り、油断は全くなく、チームは初戦から気合十分だった。

1回戦（中部大戦）の試合開始直後の先制点は、「最初の1点はおれが取ると」というキャプテンの有言実行から生まれたものだ。これで緊張も解け、チームは勢いづいた。

チームのモットーは、のびのびと楽しくプレーすることだが、小学生から大学までの各チームで「ずっと主将を務めてきた」という中村選手は「勝つことが一番楽しい」とも話した。

司令塔、キャプテンとして心がけてきたのは、「攻撃の組み立てなどで皆が納得のいく選択をすること」だ。

「皆の能力が高く、それを尊重したいので、『こうしてほしい、ああしてほしい』などと口にするのはなかった。上手な選手たちに自由にプ

レーしてもらった方が攻撃の幅も広がりますからね」

中村選手は「自分を信じてついてきてくれたチームメートと、指導してくれた実方智監督に感謝したい」と語り、インカレ制覇の喜びを振り返っている。

中央大学卒の誇りを胸に活躍しよう 4年間で「人とのつながり、人を見る力」を学んだ

中村仁宣選手は中大の4年間で「人を見る力」「人とのつながり」を学んだという。同じ卒業生へのメッセージを尋ねると、「コロナ禍の状況で、満足いく大学生活を送れなかったところもあると思いますが、中央大学卒業という誇りをもって、今後の社会で活躍しましょう」との

言葉が返ってきた。

ハンドボール部の後輩たちを「プレッシャーをはねのけてもう一度日本一を取ってほしい」と激励し、実業団リーグなどで対戦する可能性のある同期の選手たちとは「一緒に日本のハンドボール界を盛り上げていきたい」とエールを送った。

■全日本学生選手権大会

(2021年11月6～10日、甲府市・小瀬スポーツ公園体育館ほか)

▽決勝	中央大 32 (17-13、15-15)	28 大阪体育大
▽準決勝	中央大 35 (18-14、17-11)	25 筑波大
▽準々決勝	中央大 37 (22-10、15-17)	27 福岡大
▽2回戦	中央大 39 (21-12、18-13)	25 大阪経済大
▽1回戦	中央大 33 (17-12、16-16)	28 中部大

☆インカレ登録メンバー (名前、学年、身長順)

中村仁宣	④	171
部井久アダム勇樹	④	195
中村翼	④	180
高橋宗汰	④	175
宮城風太	④	185
青雅俊	③	190
蔦谷大雅	③	182
久保寺歩夢	③	185
田中響人	③	182
齋藤遵	③	182
中島海	③	178
池間飛勇	②	170
野上遼真	②	187
伊禮雅太	②	184
上山陽平	②	175
高橋侑吾	①	170
泉本心	①	185
扇谷蓮	①	182
蔦谷日向	①	184
瑞慶山充貴	①	175

☆インカレ個人表彰 (中大関係)

〈優秀選手賞〉

中村仁宣選手
蔦谷大雅選手
中村翼選手

〈特別賞〉

部井久アダム勇樹選手

〈優秀監督賞〉

実方智監督

「目標に向けて頑張ること」「常に考えること」 中大で培ったことを糧に社会人として頑張してほしい

監督 実方智

4年生の皆さん、2021年度全日本学生選手権「優勝」、本当におめでとう！この優勝は4年生の力で勝ち取ったものです。

今年のチームは4年生が主要ポジションを担い、チームをまとめ、かつ引っ張ってくれました。練習も試合も監督がすべて指示するのではなく、4年生が話し合いながらチームを作り上げてくれました。監督の役目は4年生が困ったときアドバイスするだけでした。攻撃・守備のシステムは監督がたくさん提案し、どれを使っていくかは4年生が決めてチームを完成させてくれました。

全日本学生選手権後には、そこで活躍した4年生の部井久アダム勇樹、中村翼、3年生の蔦谷大雅が、2022年1月のアジア選手権のナショナルA代表に選出されたことを誇らしく思います。一つの大学から在学生在が3人同時に選出されたことは史上初の出来事です。

4年生は卒業後、日本リーグのチームへ行く学生、民間企業に就職する学生に分かれますが、社会に出ても中央大学ハンドボール部で養った「目標に向けて頑張ること」「常に考えること」を忘れずに頑張してほしいと思っています。

最後になりますが、中央大学の関係者の皆さま、引き続き中央大学ハンドボール部へのご支援を何卒よろしくお願い致します。

天性のスピード 押し相撲を究める

住木巖太選手(法4)が押尾川部屋に入門



角界入りする住木巖太選手(中央)。右は押尾川親方、左は矢後関▲

相撲部の住木巖太選手(法4)が卒業後に角界入りする。入門するのは、中大相撲部OBの押尾川旭親方(元関脇豪風、2002年卒)が新設する押尾川部屋。同じ相撲部OBの十両、矢後関(2017年卒)も兄弟子として所属する。住木選手は「自分の相撲の型も押尾川親方と同じ押し相撲です。中大の先輩にしっかりと付いていき、頑張りたい」と抱負を語っている。

押尾川部屋は、尾車部屋の部屋付き親方として後進の指導に当たっていた押尾川親方が4月から独立して新設する。住木選手は2022年1月26日、押尾川親方、矢後関、相撲部の丹治竜一郎部長(文学部教授)、山口弘和監督とともに、中央大学の学長室を訪ね、「親方と矢後関を目標に、押し相撲で活躍したい」と、大村雅彦理事長、河合久学長に角界入りを報告した。

住木選手は「大学生活では3年生のときからコロナ禍で大会が少なくなり、練習(稽古)も満足にできずに悔しい思いもありました」と学生生活を振り返り、「就職か大相撲かと(進路を)

悩み、相撲で結果を出したい、大相撲に行こうと決めたとき、中大OBの押尾川親方から声をかけていただきました」と感謝していた。

押尾川親方は「相撲を見ると、生まれ持ったスピードがある。良いところをとことん伸ばして(番付の)上に行ってほしい。優しい性格だが、土俵では鬼になるつもりでやってほしい」と将来に期待し、矢後関も「一緒に稽古を重ねて上を目指していきたい」と話していた。



角界入りを報告した住木巖太選手(中央の学生服姿)▲

住木巖太選手

すみき・げんた。愛媛・野村高校卒、法学部4年。180センチ、150キロ。中大での主な戦績は、全日本相撲選手権大会ベスト16、東日本学生個人体重別選手権(135キロ以上級)3位、全日本学生個人体重別選手権(135キロ以上級)ベスト8など。



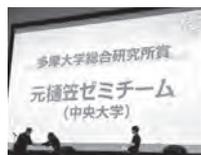
「目的、ターゲット、内容がよく練られている」と高評価

地域資源の活用、持続性を重視

多摩地域マイクロツーリズムコンテスト
「多摩大学総合研究所賞」

チーム「元樋笠ゼミ」

佐藤舞佳さん(法4) 小林歩実さん(法4)



多摩大学総合研究所賞を受賞した佐藤舞佳さん(右)と小林歩実さん(左)。中央は樋笠堯士法学部兼任講師▲

私たちのチームは、自由にカスタマイズできる地域ツアーの仕組みを考案しました。ウェブサイトで1枚のチケットを購入し、地域のいくつかの店舗・交通機関を選んでサービスが受けられるというものです。コンセプトは「癒し」。普段の旅行より手軽にリフレッシュできることを特徴としています。

そもそも私たちの目標は、地域の魅力が再発見できるような企画を作ることでした。そこで、この地域の魅力は何なのかと考えたとき、豊かな自然と農作物、家庭のような温かみのあるお店などが目に留まりました。そのような、意外と知られていない地元の素敵な側面に気づいてほしいという思いから、地域に根付く場所を巡るツアーを提案するに至りました。

他の企画との差別化を図るため、「今ある地域資源を生かすこと」「単発のイベ

ントではなく持続性のある企画にすること」の2点を特に重視し、試行錯誤しながらも「新規性のあるプランを考案する」という本質を見失わないようにも意識していました。

そのおかげか分かりませんが、企画書の段階から最終のプレゼンテーションまで大きな変更もなく進めることができました。次年度以降の事業化に向けて企業が協業の意思を表明する「ドラフト会議」(プレゼンの日に開催)の場では、これが評価に結びついたのではないかと思います。ドラフト会議では、「企画の目的、ターゲット、内容がわかりやすく、よく練られている」との講評をいただきました。他の市にも応用できるモデルであるという点も高く評価されたと考えています。

私(佐藤)は今回、就職後のための訓練になればと参加しました。特に印象に

残っているのが現地調査です。ミーティングでどれだけ頭をひねって構想を立てても、現地に行くと、想定がまったく覆されてしまうこともありました。そこから、想像だけでなく、自分の足で情報を集めに行くことの大切さを学ぶことができました。

私(小林)はこれまでも、まちづくりの現場に何度か携わったことがありますが、「観光」という切り口で取り組んだことはなかったため、いい経験になると考え参加しました。地域社会に入り込むことなく、持続的な地域振興に貢献する企画を考案する難しさを改めて実感できたと思っています。

現地調査で丁寧に対応してくださった地域の方々、関わってくださった皆さまのおかげで、賞をいただくことができました。この場を借りて感謝申し上げます。

◇多摩地域マイクロツーリズムコンテスト(タマリズム)

マイクロツーリズムは、自宅から1、2時間圏内への日帰り観光、宿泊観光による、地域の魅力再発見や地域経済への貢献に主眼を置いた旅行形態のこと。コンテストでは、大学生らが構成するチームを対象に、長期化するコロナ禍による観光・宿泊業、地域経済への影響を踏まえて、多摩市と稲城市にかかわる「郊外住宅地型」の観光まちづくりをテーマとした柔軟なアイデアを募集した。アイデアをもとに、自治体、観光協会、事業者と連携しながら、次年度以降の事業の実用化を目指す。主催は、多摩市と稲城市、多摩大学総合研究所、京王観光で構成する多摩地域マイクロツーリズムプロジェクト実行委員会。

2021年5月にスタートしたコンテストでは、行政や観光業界とのマッチングや実現可能性などの「継続性」や、「課題解決力」「創意工夫」「ウィズコロナ」「SDGs」などの基準で審査が行われ、2022年2月の報告会(公開プレゼンテーション)で5チームが表彰された。



中央大学からは、法学部の樋笠堯士兼任講師のゼミ生を中心としたチーム「元樋笠ゼミ」が多摩大学総合研究所賞、チーム「タカティーツ」が稲城市賞を受賞しました。早春号、春号の2回に分けて受賞者の喜びの声を紹介します。